

甲南女子大学蔵本江戸中期書写『源氏物語』の性格

— 須磨・初音の巻 —

野見山 亜沙美
竹内 彩

甲南女子大学図書館が所蔵する、「江戸時代書写 源氏物語」は、かつて本学の非常勤講師を務めていらつした吉永孝雄氏（浄瑠璃・文楽研究者。元羽衣短期大学学長）より、本学図書館に寄贈されたものである。本稿では、該本がどのような内容で、どのような性格を持つのかを、今回は、特に須磨の巻の前半部分と初音の巻を取り上げ、検討していきたいと思う。

一、甲南女子大学本の書誌

該本は、縦二十四・二糎、横十七・六糎の四ツ半本。列帖装。表紙は、焦げ茶色の布貼りの紙で、その材質から、昭和になって付け替えられた後候補表紙であると考えられる。表紙の中央には無地の題簽があるが、何も書かれていない。見返しは、手透き風の白い和紙。

五十四帖すべてそろっているが、「雲隠」の名を冠する巻はない。桐壺から權（朝顔）、乙女から御法、幻から夢浮橋がそれぞれ合冊になっており、合計三冊の合冊本である。一面十行書きで、一行は十八・五糎。筆跡から、五十四帖すべて同筆であると考えられる。巻名の表記の異同が六ヶ所あり、次の通りとなっている。

賢木 — 榊
朝顔 — 權
行幸 — 御幸

真木柱 — 槇柱
藤裏葉 — 藤裡葉
竹河 — 竹川

また、夕霧の巻については、二折目にあたる四丁目から十五丁目すべて綴じ誤っている。本来ならば、折の右側の頁の外側から順に四丁、五丁、六丁…となるべきところが、該本では、外側から順に九丁、八丁、七丁…と綴じられており、本来綴じられるべき順番とは逆に綴じられている。この綴じ誤りは、昭和になって合冊本にされた際のものと考えられる。

箱については、縦二十三・二糎、横二十・四糎、奥行き二十七・九糎で、前面に蓋がある。蓋の表には、右上に書片が貼ってあり、書片には「喜亭本源氏物語」と書かれている。裏の左下には、墨で「吉成藏書」と直書きされている。また、箱の内部に二段の仕切りがあったと思われる跡がある。おそらく、仕切りがあると箱に本が収まらないため、仕切りを外したのだろう。この箱は、もともとの箱ではなく、他のものを転用したと思われる。

さらに、該本の系統についてであるが、今回取り上げる須磨の巻・初音の巻を、『新編日本古典文学全集』⁽¹⁾（以下「全集本」とする）と比較したところ、大きな相違はなかったため、青表紙本系統であると思われる。全集本『源氏物語（四）』の御

法の巻の五一五頁の頭注一九について、該本では、

折からに萬のふることおほし出られて何となく其秋の事戀しうかきあつめこほる、涙をはらひもあへ給はぬまきれに御かへし

とあること。さらに、今回取り上げる須磨の巻・初音の巻の異同箇所について、『源氏物語大成』(以下「大成」とする)を見ると、三条西家本・肖柏本と一致する本文が多いことから、該本は青表紙本系統の中でも三条西家本・肖柏本に近い本文を持つ本であると考えられる。

二、須磨の巻

該本の須磨の巻は、四折で、一折り目から四折り目まですべて七枚。巻頭に二丁、巻末に二丁の遊紙がある。巻頭の二丁目の遊紙の中央に、墨流しの題簽があり、「須磨」と書かれている。題簽は、縦約六糎、横約三・一糎。表紙は茶色い布地で、その素材により原表紙ではないと考える。墨付は五十二丁。

今回考察する部分は、この須磨の巻のほぼ中間にあたる二十五丁、光源氏が須磨に行き着き都の者たちに文を送る辺りまでである。まず、該本を翻刻し全集本の本文と比較したところ、計五十二ヶ所の本文異同があった。大半のものが助詞の有無や活用形の違いなどであるが、今回はその中から、

① 墨付七丁オ三行目「有明の月いとおかしき花の木とも」

② 墨付七丁オ七行目「いとおもしろき庭にうすくきりわたりたる」

この二ヶ所について考察・検討していきたい。

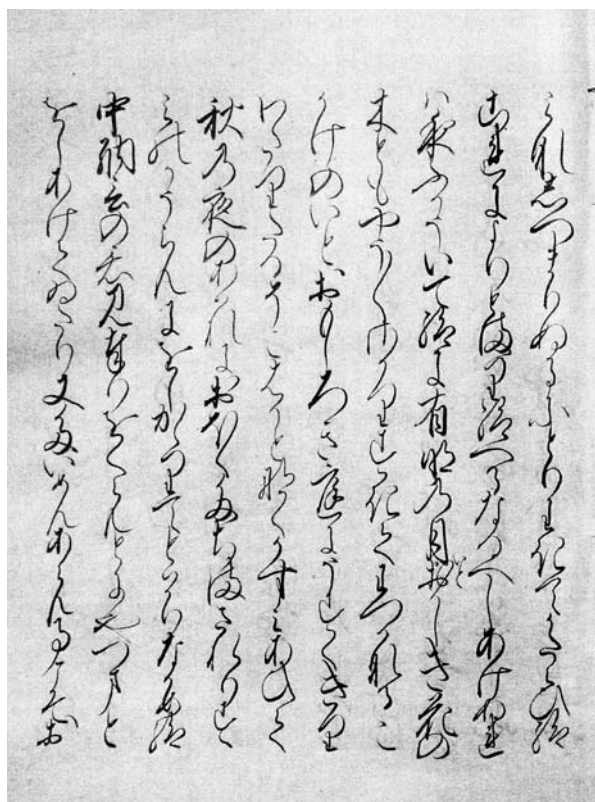
また、今回、該本がどのような性質を持っているのかを考察する過程として、須磨の巻で使用したテキストや諸本を先に列挙しておく。

- ・『新編日本古典文学全集21 源氏物語②』(底本、大島本)
- ・『新日本古典文学大系20 源氏物語 二』(底本、大島本。以下、新大系本)
- ・『日本古典文学大系15 源氏物語 二』(底本、三条西家本。以下、旧大系本)

- ・『新潮日本古典集成(第十三回) 源氏物語 二』(底本、大島本。以下、集成本)
 - ・大島本(角川書店『源氏物語』CD-ROMより)
 - ・陽明文庫本(角川書店『源氏物語』CD-ROMより)
 - ・保坂本(角川書店『源氏物語』CD-ROMより)
 - ・尾州家河内本(角川書店『源氏物語』CD-ROMより)
- ※角川書店『源氏物語』CD-ROMは初音の巻も同様

墨付七丁表(写真A参照)

みなしつまりぬるにとりわきてかたらひ給
 これによりとまり給へるなるへしあけぬれ
 は夜ふかういて給に有明の月いとおかしき花の
 木ともやうくさかりすきてわつかなるこ
 かけのいとおもしろき庭にうすくきり
 わたりたるそこはかとかすみあひて



写真A 「須磨の巻」墨付七丁 表

秋の夜のあはれにおほくたちまされりす
 みのかうらむにをしかりてとはかりなめ給
 中納言の君見奉りをくらむとにやつまと
 をしあけてゐたり又たいめむあらむ事こそお

(傍線・記号筆者、以下同じ)

※三行目「いと」は補入⁽⁵⁾

光源氏が須磨へと向かう前に、左大臣邸に赴き昔話を交わして一夜を過ぎ、まだ夜が明けていないうちに邸を後にしようとする場面である。

同場面の諸本の本文は、次の通りである。⁽⁶⁾ 傍線部分のみを引用する。

全集本（新大系本・集成本）

明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木陰のいと白き庭に薄く霧りわたる、そこはかとなく霞あひて、秋の夜のあはれに多くたちまされり。

旧大系本

明けぬれば、夜ふかく出で給ふに、有明の月いとをかし。花の木ども、やうやう盛り過ぎて、わづかなる木陰のいとしろき庭に、うすく霧渡る、そこはかとなく霞みあひて、秋のあはれに、多くたちまされり。

大島本

あけぬれは夜ふかういて給ふにありあけの月いとおかし花の木ともやうやうさかりすぎてわづかなるこかけのいとしろきにはうすきりわたりたるそこはかとなくかすみあひて秋の夜のあはれおほくたちまされり

陽明文庫本

あけぬれは夜ふかくいて給へるにありあけの月の廿日よひのほとなればはなの木とも、さかりすぎてわづかなるこかけのいとしろきにはうすくくらかりて

そこはかとなくかすみあひたるほと秋のあはれにおほくたちまされり

保坂本

あけぬれは夜ふかういてたまふにあり明の月いとをかし花の木ともやうやうさかりすぎてわづかなるこかけのいとしろき庭にうすきりわたりたるそこはかとなくかすみあひて秋の夜のあはれにおほくたちまされり

尾州家河内本

あけぬれは夜ふかくいて給にありあけの月いとおかしきやよひのはつかはかりなればはなのきとも、やうやうさかりすぎてわづかなるかけのいとしろきにはうすく、らかりてそこはかとなくかすみあひたるほとあきの夜のあはれにおほくたちまされり

まず、該本三行目の傍線部①「有明の月いとおかしき花の木ともやうやうさかりすぎて」の部分に着目したい。全集本の訳によると、「有明の月がまことに美しく感じられる。花の木々はだんだんと盛りの時が過ぎて」とある。これは、全集本が底本にしたという大島本が「をかし」と終止形で書かれていることから、直前にある有明の月を形容していると考えられたからであろう。しかし、該本では「おかしき」と連体形で書かれている。形容詞が連体形で結ばれるとしたら、まず考え得るのが係り結びであるが、この場合は係助詞にあたるものが見つからない。そうすると、A連体終止形で書かれているか。もしくは、それを文末でないと考え、Bそのあとの体言に繋がる活用である場合か。そのどちらかであろう。参考として載せた尾州家河内本の本文を見ると、傍線部「ありあけの月いとおかしき」と連体形になつており、さらに「やよひのはつかはかりなれば」と続いている。これはBに当てはめて、「有明の月がとても趣のある三月二十日ほどのことなので」と解釈することが出来るだろう。有明の月とは、陰曆十六夜以降、夜が明けたてからもまだ消えずに残っている月のことであるから、⁽⁷⁾ 时期的にも問題はない。

しかし、該本では「有明の月いとおかしき花の木とも」となっている。誤写かとも思われるが、元が終止形のもを連体形に書き間違えたとは考えづらい。ならば該本独自の本文として、その解釈を考えてみたいと思う。

まず、「有明の月」と「花」に注目したい。『源氏物語』の中で「有明の月」は六ヶ所、「花」は三三七ヶ所に使われている⁽⁸⁾。どちらも古来、風情あるものとして日本人に好まれてきたものである。では、「有明の月」と「花」の両方が詠まれている歌はないのだろうか。『新編国歌大観』⁽⁹⁾を見てみると、『源氏物語』が書かれたと思われる平安中期よりも確実に前だと言える時期に詠まれた歌を、三首見つけることができた⁽¹⁰⁾。いずれも春の歌ではなく、さらに「花」といえば一般的に「桜」をさし、「有明の月」は秋の象徴とすることが多いために季節の相違があることから、和歌数は少ないものの、「有明の月」と「花」を合わせて詠むことが稀にあったようだ。さらにこの場面は、光源氏が都を離れて須磨へ向かう直前、見知った左大臣邸を後にしようとするところである。慣れ親しんだ者たちの居る邸から、まだ夜が深く暗いうちに外に出た光源氏の胸中は言うに知れないものがあるだろう。そうすればこの「有明の月」と「花」の間に置かれた「いとおかしき」という言葉は、「目」や「花」という個々の単語を形容しているだけに留まらず、「有明の月」と「花」、両方の状況を強調しているようにも取ることが出来るのではないか。これから日が高くなると消えてしまいうる月と、時期的に盛りの過ぎた桜の花。いずれも、全盛期から衰退へと向かう「はかなさ」をどこかに含んでいる。その両方に「おかし」という形容詞がかかり、さらに風情のある、趣深い様子として読み取ることが出来るのではないだろうか。つまり、前に挙げたAとBを合わせた形ということになる。

次に、該本五行目の傍線部②「いとおもしろき庭にうすきりわたりたる」の部分に関する考察に移る。こちらは大半の諸本が「いとしろきには」となっており、全集本の頭注にも「落花が散り敷き月光に白く見えるか。白砂が月光に照り映えるさまと解する説もある。」と書かれている⁽¹¹⁾。

また、同じ大島本を底本とする新大系本の脚注には、「白砂を敷いた庭。」と書かれ、例として若菜上の巻の「雪はところ／＼消え残りたるが、いと白き庭のふとけぢめ見えわかれぬほどなるに」という一文が挙げられている。訳は「雪は、所々に消え残っているのが(暗くて)まっ白な庭とすぐには見分けがつかないほどのな

で」とされ、「白き庭」を「白砂を敷きつめた庭」と解釈しているのが分かる。また、集成本若菜上の頭注には「寝殿造りの庭は、白砂を敷きつめる。」とあり、左大臣家邸の庭にも白砂が敷かれていたという可能性は極めて大きいだろう。

以上が、現在の「いと白き庭」の解釈であるが、ここで全集本の本文に引いた点線部、「そこはかとなく霞みあひて」に注目したい。「そこはかとなく霞み合う」とは、「ほんやりと霞みがかつている様子」と解釈して良いだろう。「いと白き庭」を「白砂が月光によって照り映えている庭」と解釈したならば、白砂を敷きつめた庭がはつきりと白く見えている状況に対し、薄い霧が一面に広がり、ほんやりと霞みがかつているという状況は相反しているように思われるのである。

では、該本の独自本文である「いとおもしろき庭」としての解釈を考えてみたい。

まず、「おもしろし」という単語について、『角川古語大辞典』によると

- a. 外界の状況から心楽しい気持ちになるさま。愉快だ。
- b. 心惹かれるところがあるさま。趣があるさま。
- c. 他と一風変わっていて、それが関心をひくさま。
- d. 常識を外れていて滑稽であるさま。おかしい。

の四つの意味に大きく分けることができる⁽¹²⁾。この場面には月や花の木、庭などの風景に使われているため、bの意味を当てはめて良いだろう。

次に、「おもしろき庭」を挟んで前後にある「有明の月」と「霧」という単語に着目したい。『源氏物語』と同時期に書かれた文学の中で、この二つの単語が同時に使われている場面はないかと調べたところ、『枕草子』と『和泉式部日記』に見つけることができた⁽¹³⁾。

有明のいみじう霧りわたりたる庭に下りてありくを聞しめして、御前にも起きさせたまへり。うへなる人々の限りは出でぬ、下りなどして遊ぶに、やうやう明けもて行く。

(『枕草子』第七十四段)

ある所に、なにの君とかや言ひける人のもとに、君達にはあらねど、そのころ
いたうすいたる者に言はれ、心ばせなどある人の、九月ばかりに行きて、有明
のいみじう霧り満ちておもしろきに、名残思ひ出でられむと、ことばをつくし
て出づるに、今はいぬらむと、遠く見送るほど、えも言はず艶なり。

〔枕草子〕第一七三段

女は寝で、やがて明かしたつ。いみじう霧りたる空をながめつつ、明くなりぬれ
ば、このあかつき起きのほどのことどもを、ものに書きつくるほどにぞ例の御
文ある。

秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて帰りにしかな

〔和泉式部日記〕

特に『枕草子』第一七三段には「有明のいみじう霧り満ちておもしろきに」、つま
り、有明の月がとて霧が立ち込めていて明るく美しいという描写がなされてい
る。少なくとも『源氏物語』が書かれた当時、霧わたつた空に有明の月が上るとい
う光景は風情あるものとして、人々の美意識に存在していたと言えるだろう。それ
ならば、該本傍線部の「おもしろき庭」にも、同様の美意識が働いていると考える
ことは十分に可能ではないだろうか。「趣があるさま」と解釈出来る「おもしろき」
風景の内容として、「有明の月」「花」「さかりすきてわつかなるこかけ」を当ては
めることが出来る。これらはすべて風情のある、四季折々の風景であると言つて良
いだろう。そしてそれによつて、この「おもしろき」は、先ほど述べた「いとわか
しき」とも呼応することになる。風情を感じさせる月と花を見渡すことのできる、
趣のある庭を見つめ、そして薄い霧が庭全体をほんやりと霞ませているような風景
を、作者は「秋の夜のあはれにおほくたちまされり」と言ったのである。

以上、この二点を考察すると、該本では、「有明の月がとてすばらしく浮かび、
まことに風情のある桜の花たちが次第に盛りを過ぎて、わずかに残つた木陰がとて
も趣深い庭に、うつすらと霧が立っているのがほんやりと霞み合っていて、秋の夜

のしみじみとした風情よりも多く勝っている。」と解釈することができる。

三、初音の巻

該本の初音の巻は、二折で、一折目も二折目も五枚。巻頭に二丁、巻末に二丁の
遊紙がある。巻頭の二丁目の遊紙の中央に、雲型模様の題簽があり、「初音」と書
かれている。題簽は、縦六・一程、横三程。須磨の巻と同様、原表紙ではなさそう
である。墨付は十六丁。

須磨の巻と同様に、該本と全集本とを比較したところ、三十六ヶ所の本文異同が
あった。その中でも、本文の解釈にかかわってくると思われる、

① 墨付六丁オ七行目「からのとうきやうき」

② 墨付十一丁ウ二行目「うつせみのあま君」

③ 墨付十四丁ウ八行目「こちたきもの色あひ」

この三ヶ所について、考察・検討していきたいと思う。

また、今回、該本の初音の巻がどのような性格を持つかを考察する過程で、使用
したテキストを先に列挙しておく。

・『新編日本古典文学大系22 源氏物語③』（底本、池田本）

・『新潮日本古典集成（第二十三回）源氏物語 四』（底本、池田本）

・『日本古典文学大系15 源氏物語 二』（底本、三条西家本）

・『新日本古典文学大系20 源氏物語 二』（底本、大島本）

① 墨付六丁オ

給へはの給はせむま、にこそはと聞え給さもある事

そかし 暮かたに成ほとにあかしの御かたにわたり給

ちかきわた殿のをしあくるよりみすのうちの

をひ風なまめかしく吹にほはかしてものよりことに

けたかくおほさるさうしみは見えずいつらと見
まはし給ふにすゝりのあたりにきは、しくさうし
ともとりちらしけるをとりつゝみ給からのとうき
やうきのことくしきはしさしたるしとねにお
かしけなるきむうちをきわさとめきよしある
火おけにしゝうをくゆらかして物ことにしめたるに

ここは、六条院落成後初となる正月を迎え、光源氏が新年のあいさつをするため
に明石の君のもとを訪れる場面である。

同場面の諸本の本文は次の通りである。¹⁷⁾

全集本(集成本)

唐の綺のことくしき縁さしたる褥にをかしげなる琴うちおき、わざとめきよ
しある火桶に、侍従をくゆらかして物ことにしたるに、裏被香の香の紛へる
いと艶なり。

旧大系本

唐の東京錦の、ことくしき縁さしたるしとねに、をかしげなる琴うちおき、
わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして、ものごとにしめたるに、衣
被香の香のまがへる、いと艶なり。

新大系本

唐の東京錦のことくしき端さしたるおかしげなる琴うちをき、わざとめきよ
しある火おけに侍従をくゆらかして物ことにしめたるに、衣被香の香の紛へる
いと艶なり。

大島本

からのとうきやうきのことくしきはしさしたるとねにおかしけなるきむうち
をきわさとめきよしある火おけにしゝうをくゆらかして物ことにしめたるにえ

ひ香のかのまかへるいとえむなり

陽明文庫本

からのとうきやうきのことくしきはしさしたるしとねにおかしけなるきんう
ちをきわさとめきよしある火をけにしゝうをくゆらかして物ことにしめたるに
えひかうのかのまかへるいとえんなり

保坂本

からのとうきやうきのことくしきはしさしたるしとねにをかしけなるきんうちを
きてわさとめきよしある火をけにしゝうをくゆるかして物ことにしめたるにえ
ひかうのかのまかへるいとえんなり

尾州家河内本

からのとうきやうきのことくしきはしさしたるしとねにおかしけなるきんう
ちをきわさとめきよしある火をけにしゝうをくゆらかして物ことにしめたるに
えひかうのかのまかへるいとえんあり

該本の傍線部「からのとうきやうき」は、全集本では、「唐の綺」となっている。
また、旧大系本・新大系本では、「唐の東京錦」となっている。他本では、大成に
よると、河内本・別本のほとんどが該本と同様に「からのとうきやうき」という本
文であるが、青表紙本では多くが「からのき」であるようだ。¹⁸⁾

この「とうきやうき」とは、大系本の本文にもあるように、東京錦のことであ
る。小学館の『日本国語大辞典』の「東京錦(トンキンにしき)」の項を見ると、
「トンキン産の錦。また、その様式。赤白の碁盤目の白地に、赤で蝶や鳥の模様を
織り出したもの。」とある。また、「綺(き)」については、「あや織りの絹。」とあ
ることから、文様を織り出してある東京錦のほうが、綺よりも格の高いものである
ということがわかる。

『源氏物語』において、「からのようきやうき」は他に例が見られないが、「から
のき」は、全集本を見ると、次の通り、該当箇所以外に五例見られる。

(1) 桜の唐の綺の御直衣、葡萄染の下襲、裾いと長く引ききて、皆人は袍衣なる
に、あざれたるおほきみ姿のなまめきたるにて、いつかれ入りたまへる御

さま、げにいとことなり。(花宴)

(2) 紙屋紙に唐の綺を陪して、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり。

(絵合)

(3) 左に紫檀の箱に蘇芳の華足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の綺なり。(絵合)

(4) 葡萄染の御指貫、桜の下襲、いと長う裾ひきて、ゆるゆるとことさらびたる御もてなし、あなきらきらしと見えたまへるに、六条殿は、桜の唐の綺の御直衣、今様色の御衣ひき重ねて、しどけなきおほきみ姿、いよいよたとへんものなし。(行幸)

(5) 童は、青色に蘇芳の汗衫、唐綾の表袴、相は山吹なる唐の綺を、同じさまにととのへたり。(若菜下)

このように、光源氏の衣装に二例、明石の女御の女童の衣装に一例、藤壺の前で行われた絵合に出される『竹取物語』の絵巻物の見返しに一例、冷泉帝の前で行われた絵合で使用された打敷に一例見られる。「唐の綺」は、光源氏の衣装や、天皇の前に出されるような調度品などにも使われていることから、「からのようきやうき」のほうが格上ではあるものの、「唐の綺」も相当格の高いものであることがわかる。河添房江氏が指摘しているように²⁰⁾、「唐の綺」よりも格の高い東京錦が、中流貴族である明石の君の部屋にあるのは、不相応であるとして、青表紙本の多くでは、「からのき」となっているのだろう。

確かに、明石の君ほどの身分の人の部屋にある褥にしては、豪華すぎるものであるのかもしれない。しかし、彼女の後ろには、明石の入道がついているのである。この明石の入道のような財力を持つ人が後見についているならば、「からのとうきやうき」の褥を用意することは、可能であったのではないだろうか。

また、「唐の綺」は、明石の女御つきといえども、女童でも着ることのできるものようである。光源氏自身、「唐の綺」の衣装を持っていることから、その「唐の綺」が縁取りしてある褥を用意したところで、光源氏の興味をひくことはできないだろう。だからこそ、明石の君は、「唐の綺」よりもさらに格の高い「からのとうきやうき」を縁に使用してある褥を用意したのである。このような明石の君の演出

があったからこそ、光源氏は、紫の上の機嫌を損ねるとわかっていながらも、六条院で迎える初めての正月の夜を、明石の君のもとで過ごすことに決めたのである。

以上のように、「からのき」でなく、該本にも記す「からのとうきやうき」であると、明石の君の聡明さが、より際立って感じられはしないだろうか。

②墨付十一丁ウ

ぬ花を見る哉ひとりこち給へとき、しり給は

さりけむかしうつせみのあま君にもさしのぞき

給へりうけはりたるさまにはあらずかこやかにつ

ほねすみにしなして佛はかりに所えさせ奉て

をこなひつとめけるさまあはれに見えて経仏の

かさりはかなくしたるあかのくなともおかしけに

なまめかしく猶心はせありとみゆる人のけはひ

なりあをにひのき丁心はへおかしきにいたくあ

かくれて袖くちはかりそ色ことなるしもなつ

かしければ涙くみ給ひて松かうら嶋をはるかに

こは、新年を迎えて数日経ち、光源氏が二条院の東院の空蟬のもとを訪れる場面である。他本では、

全集本(集成本)

空蟬の尼衣にもさしのぞきたまへり。

旧大系本

空蟬の尼衣にも、さしのぞきたまへり。

新大系本

空蟬の尼衣にもさしのぞき給へり。

大島本

うつせみのあま衣にもさしのそき給へり

陽明文庫本

空蟬のあま衣にもさしのそき給へり

保坂本

うつせみのあまころもにもさしのそきたまへり

尾州家河内本

うつせみのあまころもにもさしのそき給へり

となつてゐる。

該本の傍線部「うつせみのあま君」は、全集本では「空蟬の尼衣」となつており、他本を見ても、ほとんどの本で、「うつせみのあまころも」となつてゐる。大成によると、「うつせみのあまきみ」となつてゐる本は、池田本と阿里莫本の二つだけで、かなり少ない本文であることがわかる。

この「うつせみのあまきみ」は、言うまでもなく、空蟬という人物のことを指しているが、「うつせみのあまころも」も、「あまころも」となつてゐるが、空蟬のことを指している。このように、「尼衣」が人物を指すのは、にわかにならざる感がある。

『源氏物語』において、「あまころも」は、「うつせみのあまころも」以外に二例見える。特に、行幸の巻に見える「あまころも」は、

宮、はた、まいて、姫君の御事を思し出づるに、ありしにまさる御ありさま、勢ひをみたてまつりたまふに、飽かず悲しくて、とどめがたく、しほしほと泣きたまふあま衣は、げに心ことなりけり。(全集本より)

のように、「うつせみのあまころも」と同様に、大宮(葵の上の母)を指すのに用いられてゐる。しかし、ここでは、全集本の頭注にあるように、尼の衣と海女の衣を掛けて、「涙に濡れるほど泣く」の意も含まれており、純粹に人物を指す表現ではないようだ。一方、該当箇所空蟬の場合は、特に尼衣と海女の衣とを掛けて、涙に濡れるといった意を響かせてゐるわけではない。

以上のように、「尼衣」が人物を指すという表現はあるが、該当箇所では、特に掛詞の要素は見られない。「あまころも」よりも、該本にもあるように「あまきみ」となつてゐるほうが、容易に理解することができるだろう。

③墨付十四丁オ

き物なれと所からにやおもしろく心ゆきい
のちのふる程なり殿の中將の君内の大殿
の君たちそこらにすくれてめやすく花や
かなりほのく〜と明行に雪や、ちりてそ、ろ
さむきにたけかはうたひてかよれるすかたな
つかしきこゑ〜のゑにもかきと、めかたからむこそ
くちおしけれ御かた〜いづれも〜おとらぬ
そてくちともこほれてたるこちたきもの
の色あひなとも明ほの、空に春のにしきを
たちいてにける霞のうちかと思わたさるあ

ここは、六条院へ訪れた男踏歌の一行を六条院に住まう女君たちが見物している場面である。他本では、

全集本(集成本)

御方々、いづれもいづれも劣らぬ袖口ども、こほれ出でたるこちたさ、物の色あひなども、曙の空に春の錦たち出でにける霞の中かと思わたさる。

旧大系本

御かた〜、いづれも〜、おとらぬ袖口ども、こほれいでたるこちたさ、もの、色あひなども、「あけほの、空に春の錦たち出でにける霞のうちか」と、見わたさる。

新大系本

御方く、いづれもく劣らぬ袖口どもこぼれ出たるこちたき、物の色あひなども、あけほのの空に春の錦たち出でにける霞のうちかと思へわたさる。

大島本

御方々いつれもくおとらぬ袖くちともこぼれ出たるこちたき物の色あひなどもあけほの、空に春のにしきたちいてにける霞のなかと思へわたさる

陽明文庫本

御かたくいつれもいつれもおとらぬ袖くちともこぼれ出たるこちたきもの、いろあひなどもあけほの、そらに春のにしきたち出にける霞のうちとみわたさる

保坂本

御かたくいつれもくおとらぬそてくちともこぼれいてたるこちいたきもの、いろあひなどんあけほの、そらにはるのにしきたちいてにけるかすみのなかと見えわたさる

尾州家河内本

御かたくいつれもくおとらぬ袖くちともこぼれいてたるこちたきもの、色あひなどもあけほの、そらに春のにしきたちいてにけるかすみの中にかと見えわたさる

該本の傍線部「こちたき」は、全集本や大系本では「こちたさ」となっている。大成によると、青表紙本系統の本は、多くの本において「こちたさ」となっている。「こちたき」となっている本は、御物本・尾州家河内本・麥生本・阿里莫本・陽明文庫本の五つである。

該当箇所²²の文字表記について、「こちたき」と「こちたさ」というように、「き」と「さ」の違いであるため、誤写という可能性も考えられる。その可能性を踏まえて検討したところ、写真Bにあるように、該本では、「起」と書かれていることから、「幾」と「左」とを誤写した可能性は低いと考えてよいだろう。

解釈については、「こちたさ」の場合は、形容詞「こちたし」に接尾語「さ」がついて名詞になっており、御簾から袖口が「こぼれいでたる」さまが「こちた

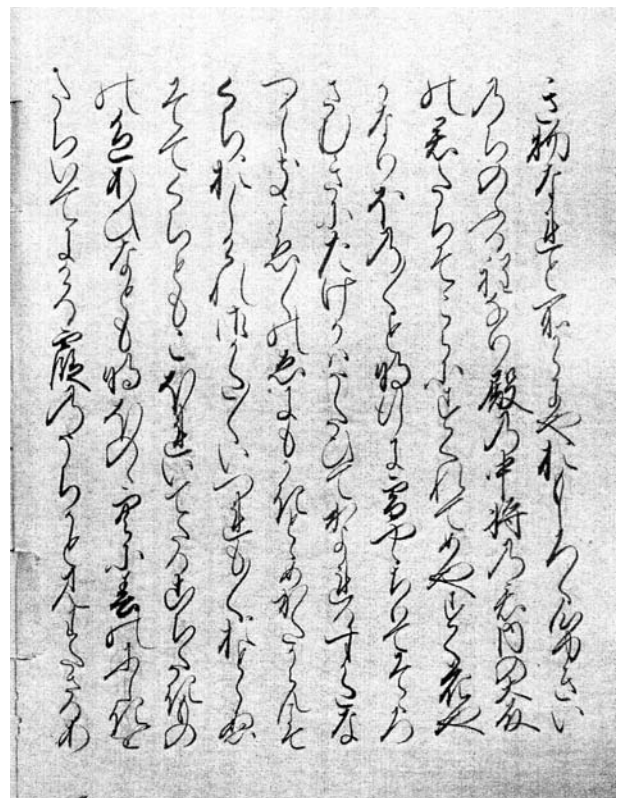


写真 B 「初音の巻」墨付十四丁 表

し、と解釈でき、全集本の訳では、「女房たちの袖口が御簾から仰山なほどこぼれ出ていて…」となっている。

一方、該本にも記す「こちたき」の場合、「こちたき」は、形容詞「こちたし」の連体形であるので、「こちたし」が、「ものの色あひ」にかかる。このように、「こちたき」となると、「ものの色あひ」が「こちたし」と解釈できる。

また、『源氏物語』における「こちたし」(活用形も含む)の用例は、二十五例ほどあり、その中に、

(ア) 白き御衣に、色あひいと華やかにて、御髪のいと長うこちたきをひき結びてうち添へたるも、かうてこそらうたけぬなまめきたる方添ひてをかしかりけれと見ゆ。(葵)

(イ) 院の御賀、まづおほやけよりせさせたまふことどもいとこちたきに、さしあひては便なく思されて、すこしほど過したまふ。(若菜下)

という箇所がある。(ア)は、葵の巻の葵の上の出産の場面で、出産の際に着用す

る白い衣と、葵の上の長々と豊かな髪との色合いが華やかであることを言っている。髪が豊かなさまを表している。(イ)は、若菜下の巻の、光源氏が六条院で催す女楽の日程について、同時期にある朱雀院の五十の賀が、さぞかし盛大であろうと思ひ、期日を延ばす場面で、儀式が盛大であることを表すのに用いられている。従って、「御簾からこぼれ出ている女房たちの袖口の豊かで華やかな色合いが……」というような意味になるだろう。さらに、該本点線部「春のにしき」について、『古今和歌集』には、

見わたせば柳桜をこきませて都ぞ春の錦なりける²³

という和歌がある。つまり、「柳や桜が、色とりどりで、色彩が豊か」なのが「春の錦」ということである。該本の「春のにしき」もこの和歌の「春の錦」同様に、豊かな色彩の表現として用いられた語句であると考えられるだろう。以上のことから、「春の錦」と「見わたさる」ほど、御簾から「こぼれ出ている」袖口の「色あひ」が「こちた」し、と解釈することができる。

このように、該本では、「女房たちの御簾からこぼれ出ている出だし衣の色彩に富んだ豊かな色合いが、明け方の空に春の錦がたち出でたかのように見える」と解釈することができ、より色彩感あふれる表現として読むことができるのではないだろうか。

以上のように、該本は、ほとんどが青表紙本系統の本文と一致し、青表紙本系統、その中でも、特に三条西家本・肖柏本と近い性格を持っていると考えられる。今回提示した該本の本文は、本稿で考察・検討したような解釈もできると思われる。今後も、該本についての考究を進めていきたい。

注

- (1) 阿部秋生 秋山慶 今井源衛 鈴木日出男 『新編日本古典文学全集 源氏物語(一)』(六)『小学館 一九九四年』一九九八年
- (2) 全集本『源氏物語(四)』五一五頁の頭注一九に、「をりからよるづの事(ふる事)証

・幽)おぼし出でられて、なんとなくその秋のこと恋しうかき集め、こぼるる涙を払ひもあへ給はぬまぎれに御かへし」とする本がある(明・証・幽・肖)。河内本・別本はこの本文はない。」とある。

(3) 池田龜鑑『源氏物語大成』中央公論社 一九八四年

(4) 池田龜鑑氏の『源氏物語事典 下巻』(東京堂 一九六九年)の諸本解題や岡野道夫氏の『証本源氏物語の本文について―特に肖柏本との関係について―』(『語文』一九六六年)により、三条西家本(書陵部蔵・日本大学蔵)と肖柏本とが近い本文を持つことは明らかである。

(5) 全五十四帖を一見すると補入箇所は少なかったが、まだ全てを考察できてはいないため、今回は言及を避けることとする。

(6) 全集本、新大系本、集成本は底本が同じ大島本であるため、代表して全集本の本文を挙げる。こととする。

(7) 『日本国語大辞典 第二版 ①』小学館 二〇〇〇年

(8) 「有明の月」は「須磨」以外に、「花宴」、「橋姫」、「椎本」、「総角」、「浮舟」。「花」は「桐壺」、「夕顔」など計四八帖に見られる。

(9) 『新編国歌大観 CD-ROM版』角川書店 一九九六年

(10) 三巻19「貫之集」102「いづれをか花とはわかむ長月の有明の月にまがふ白菊」三巻49「海人手古良集」13「卯の花のさかりになれば郭公夜ぶかきねにぞ有明の月」七巻14「能宣集」323「ありあけの月のかげにもほととぎすまつしのめにもみる(ママ)うのはな」以上の三首。

(11) 『新編日本古典文学全集』源氏物語(二)一六七頁、注三一。

(12) 『新日本古典文学大系』源氏物語(二)九頁、注二〇。

(13) 『新日本古典文学大系』源氏物語(三)二四五頁、注六を参照。

(14) 『新潮日本古典集成(第十三回)』源氏物語(五)六〇頁、注五。

(15) 『角川古語大辞典 第一巻』角川書店 一九八二年

(16) 松尾聰 永井和子『新編日本古典文学全集』枕草子 小学館 一九九七年

藤岡忠美 中野幸一 犬養廉 石井文夫『新編日本古典文学全集』和泉式部日記

紫式部日記 更級日記 讀岐典侍日記』小学館 一九九四年

(17) 全集本と集成本は、底本が同じ池田本であるため、代表して全集本の本文を挙げる。こととする。以下同じ。

(18) 新大系本『源氏物語 二二三八三頁の脚注二二に、「唐の東京錦の、たいそう立派に縁(ちひ)取りをした敷物の上に、『唐の東京錦』は、安南の東京で産出した錦で、白い地に鳥や蝶などの赤い文様を織り出したもの。『褥』は敷物。青表紙他本多く「からのきのことくしき」とある。

(19) 『日本国語大辞典 第二版 ③』小学館 二〇〇二年

(20) 河添房江氏の著書『光源氏が愛した王朝ブランド品』(角川学芸出版 二〇〇八年)において、一八五頁に、『東京錦』ではなく、『綺』の縁をつけた袴となっている本もあるのですが、それはおそらく明石の君の部屋にあった袴にしては、分不相応に格の高いものなので、書き変えられたものなのでしょう。」との指摘がある。

(21) 全集本『源氏物語(三)』三〇九頁の頭注二二に、『あま衣』は、『尼衣』(大官は出家の身)と『海女衣』とをかけて、濡れるほどに泣く、の気持。多少諧謔気味のある表現で、大官固有の感激をいう。」とある。

(22) 全集本による。

(23) 『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』巻一・春上からの引用。この歌は、五十六番の素性法師の歌である。

執筆担当

・「須磨」：野見山亜沙美(博士後期課程一年)

・「初音」：竹内彩(博士前期課程一年)